

社会システム理論に影響を与えた進化論の枠組み「変異→選択→安定化」を用いて社会を理解する

「変異→選択→安定化」

古くからある「安定化」した秩序が用済みになり、加速度的に崩壊するのと入れ替わりに、代替選択肢が無数に生まれては消える動的な模索過程（＝「変異」）へ。バリエーションの量産から、選択的な淘汰を経て、比較的安定した秩序に至る。

社会の「変異」（＝崩壊）段階

70年代にモノの豊かさが達成され、先進各国は、何が幸いなかが人それぞれに分化する不透明な「近代成熟期」を迎えた。人口学的にも経済学的にも流動性が高まり、文化的には際限ない分化が生じる。

システムごとに崩壊時期や崩壊速度はかなりズレるものの、各国民国家のみならず、また各サブシステムは相互依存しているため、変化の波及は免れない。

その結果、今（＝2004年当時）は「選択」の段階へ。無数の「変異」の中から何を「選択」すべきかが問われる。

→選択をメタレベルで制御する抽象的な選択原則として、動機づけの非自明性が、急浮上＝目的のアノミー

三種類の不自由

1. 選択肢の不在 選択肢を意識することもできない
2. 選択肢の制約 外的な制約により、選択肢にアクセスできない 手段のアノミー
3. 選択肢の過剰 どれを選ぶ(ことを目指す)べきかわからない 目的のアノミー

初期の近代システムが生み出すもの

- ・政治にも経済にも還元できない抽象的な「社会」という概念
- ・特定の役割や属性に還元できない抽象的な「人間」という概念

⇒社会も人間も原則的にどうとでもありうるという、選択可能性の産出に由来する

近代システム

抽象的な選択可能性の産出→「1. 選択肢の不在」による不自由を順次消去

↓

選択可能性が豊かになり、「2. 選択肢の制約」による不自由が顕在化→近代の成熟によりモノの豊かさが達成されることで克服

↓

国民的に共有されていた「2.選択肢の制約」による不自由という一枚岩の動機づけの陰で抑圧されていた多様な選択肢が可視的になり、社会に「変異」段階が訪れる
→多様性を抑圧する壁の崩壊による解放感という動機づけも風化し、今度は「3.選択肢の過剰」による不自由が意識され始める。「これが今日(2004年)の世紀末的状况」
(手段のアノミーから目的のアノミーへ)

時代的文脈の変化

「変異」から「選択」へ
「壁の破壊」から「原則獲得」へ
「からの自由」から「への自由」へ
「制度問題」から「実存問題」へ

このような変異・崩壊過程に要求される代替的な実存形式のモデルを提示することが目的とされている

宮台真司のサブカルチャー分析の手法

1. 受け手の人格類型ごとにサブカルチャー接触状況が異なるのを手がかりに、サブカルチャーの機能とそれを要求する人格を、共に分析する、『サブカルチャー神話解体』で採用した手法
2. 同時代のサブカルチャー分布と、その歴史的变化を手掛かりにして、社会全域におよぶコミュニケーションの生態学的な遷移を記述するもの
3. 表現が抱える個別の意味世界(システム理論では意味論という)を問題にするもの

本書では代替的な実存形式のモデルを提示することが目的とされているため、表現が抱える「個別の意味世界(意味論)」(=実存)を問題にする